
アイヌ民族博物館だより

THE AINU MUSEUM

1998. 7. 31

No. 39



マキリ（小刀） 兎玉コレクション No.62228

アイヌが日常用いた刃物。鞘と柄には鹿角が用いられ、素材を生かした美しい彫刻が施されている。機能性だけでなくデザインの面白さも目を惹く逸品である。

サーミの地イナリ訪問記

フィンランドのラップランド州にイナリという、日本の散村に似た小さな町がある。このイナリの町に北欧の少数民族サーミの文化を紹介する博物館「サーミ博物館」がある。

サーミ博物館は、イナリ湖岸の一面に広大な敷地を有し、自然を巧みに利用した復元家屋や生活用具などの展示で、かつてのサーミの生活文化を紹介している野外博物館である。

アイヌ民族博物館とは、1984年に姉妹博物館の提携を結んでおり、以来、学芸員の相互派遣など、活発な交流を続けている。

そのサーミ博物館が本年3月、国立の博物館施設として新たにオープンした。同月27日に開催された開館式典にはフィンランド国内外の関係者とともに、アイヌ民族博物館も招待を受け、職員5名が参席した。

以下、本年3月24日～4月2日の10日間、上述の博物館開館式典参加、及びサーミとの交流を主旨として実施したフィンランド行 特に、イナリでの4日間を中心に報告したい。

3月25日夕刻にヘルシンキに到着した我々は、翌26日、フィンランド教育省を訪問し、同省フレッカ氏と懇談。同氏は1994年に白老で「先住民国際フェスティバル」を開催した折、サーミとともにアイヌ民族博物館に来館しており、3年ぶりの再会である。同氏とは、サーミ博物館とアイヌ民族博物館の姉妹博物館交流の側面的協力としての、フィンランド教育省の協力体制等について話し合いを持った。

3月27日午後2時、サーミ博物館開館式典に出席する。祝辞を述べるとともに、古式舞踊5曲（ムックリ、エムシリムセ、クリムセ、ヤイサマ、イヨマンテリムセ）を披露。後、館内を特別観覧する。夕刻、記念祝賀会が開催され、再度、古式舞踊を披露する。

開館式には、フィンランド国文化大臣、ラップランド州知事、ロバニエミ市長、ラップランド大学学長の他、近隣諸国の博物館館長・学芸員らが参席した。日本からは、我々の他、北海

道フィンランド協会専務理事井口光雄氏が参席した。

翌28日は、タルモ・ヨンパネン館長とともに改めて新博物館を見学した。

新博物館は、既存の野外博物館施設に隣接して建てられ、イナリ町のピジターセンターとし



サーミ博物館



サーミ博物館開館式典
アイヌ民族博物館からヨンパネン館長に記念品を贈与



開館式典にて古式舞踊を披露

ての機能をも有している。展示場は、四囲の壁面にイナリの自然 動植物の写真パネルを展示し、中心にサーミの生活文化を展示している。特徴的なのは、民具をただ展示するのではなく、材料、製作法、使用法などを模型・解説板を用いて詳述していることで、サーミの文化にはじめて触れる者には大いに役立つ工夫である。

さらに、非常に印象深い展示があった。それは、「サーミの生活文化の歴史の流れ」の展示である。具体的には、かつて使用されていた生活用具等の展示の中心に、スノーモービルと携帯電話ノキアが置かれているのである。すなわち、「かつてはこのような生活用具を使用していたけれど、現在は、スノーモービルも携帯電話も使用している」との表現であり、サーミの生活文化の変容を呈示しているのである。

我々アイヌ民族博物館も同様であるが、博物館の資料展示はその多くが過去の資料の展示に終始し、「現代」をはじめとして「歴史の流れ」の展示が欠如している。そうした点も含めて、サーミ博物館の展示は、大いに参考となった。

29日、サーミ・ラジオ局を訪問する。日曜日で閉局のところ、民族文化交流の一環をもって、特別に見学させていただく。ご案内いただいたのは、イナリ・サーミのヴェイコ・アイキオ氏で、同氏とは、1984年以来、十数年に及ぶ交流があり、アイヌ民族博物館にも2度来館している。

サーミ・ラジオ局は、国営のサーミ語による放送局として、1947年に設立され、昨年、50周年を迎えている。設立当時、1日の放送時間はわずか10分であったのが、現在では8時間となり、そのうち、イナリ放送局制作分が4~5時間、ノルウェーの放送局制作分が2時間30分、スウェーデンの放送局制作分が30分となっているそうである。

現在、スタッフは16名で、イナリには13名が常勤し、他に、ウツヨキに2名、カラシオキに1名それぞれ常勤している。サーミの母語であるサーミ語の復興、及び日常語化にこのラジオ放送が大いに貢献しているが、用いているサーミ語のほとんどが北サーミ語のため、



記念祝賀会にて



サーミ・ラジオ局訪問



サーミ農家の母子



トナカイ皮加工実習（サーミ技術学校）

フィンランド南部及びロシア在住のサーミ（コルト・サーミ）には理解できないという問題も抱えている。

午後、ヨンパネン館長とともに、サーミ農家を訪問する。サーミの主たる生業はトナカイ飼育であるが、我々が訪問した農家もトナカイ飼育を主とし、付随して、観光的にサーミ料理を試食させている。飼育法も伝統的なものに現代的なものをどんどん取り入れ、近代化を促進している。因みに、生活を維持するためには200頭以上のトナカイを飼育しなくてはならないそうである。

30日、イナリにあるサーミ技術学校を訪問する。同校は、サーミの工芸品等の製作技術を教授する機関で、現在、115名の生徒が学んでいる。教員は講師を含めて30名。寄宿舎も完備している。ラップランド州立である。

授業のコースは、一般教養の他、木工科、皮革科、貴金属科、デザイン科、手芸科に分かれ、実技を主体として、ほとんどの時間が製作実技に当てられている。また、トナカイ飼育法、漁猟猟法なども教科の一つとして教授されている。

修学期間は1年乃至2年で、目的によって2週間という短期入学もある。16歳（中学校卒）から入学できるが、現在在校生は高校を卒業してから入学の20～25歳代が多いという。

公機関の施設によって民族文化の伝統的及び今日的技術を習得させるという施策は、世界的に民族文化の復興・保存が叫ばれる今日にあって、学ぶべきものを多とした。

31日、ロバニエミ市にあるラップランド大学附属北極圏センターを訪問する。同センターは、大学の研究部門とラップランド州の博物館展示施設とに分かれ、研究部門はラップランド州を中心とした北極圏の自然、文化等の研究成果、並びにサーミをはじめとする北極圏に居住する少数民族の文化を調査・研究し、収集した資料を展示・公開している。州の博物館展示施設は、同じくサーミ文化の展示とともに、ロバニエミ市を中心としたラップランド州の歴史・民俗・生活文化等が展示されている。

同センターにおけるサーミに関する資料の収集・展示は北欧でも有数のものであり、展



サーミの伝統的服飾品（脚巻）の製作実習
（サーミ技術学校）

示法など、大いに参考になった。

因みに、アイヌ民族博物館では、1994年4月14日から約6ヶ月間、同センターを会場に、「アイヌ民族文化特別展～祈りの文化～美と華の世界」と題した特別展（展示資料数370点）を開催しており、今回の訪問により旧交をあたためることができた。

今回のフィンランド行は10日間という短い日程であったが、博物館として民族文化保存を考えるうえで大いに示唆を与えられた。たとえば、上述したように、サーミ博物館の展示法は、歴史の流れと文化の変容をどう表現展示するかという課題とひとつの答えを呈示してくれた。

博物館が単なる「過去」を展示する場に終始するのではなく、現代をも視野に入れた「歴史」の展示が必須の時代になってきたことを痛感したフィンランド行であった。

末筆ではあるが、このたびのフィンランド行は、財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構の「アイヌ文化国際交流助成事業助成金」を受けて実施した。同機構に感謝申し上げるとともに、行をともし、渉外・通訳などに終始ご協力を賜った北海道フィンランド協会専務理事井口光雄氏に記して深甚なる謝意を表する次第である。

（秋野茂樹）

「便所送り」儀礼の実施

当館の復元家屋の一つである2号チセの裏手に、昭和59年に建てられた職員用便所があった。今年度、当館ではその便所周辺の土地を利用して、チセ（復元家屋）を新たに建設するなど、土地の再活用計画があり、また便所自体も古くなったため、今年4月、その職員用便所を取り壊し、他の場所に新築することとなった。

便所の取り壊しにあたり、当館職員が、藤村久和氏（北海学園大学教授）の指導のもとに、便所送り儀礼を実施した。

これまで当館では、イオマンテ、チナサンケなどさまざまな儀礼を実施してきているが、これらは昔のように、実生活に即して行われているわけではない。現在当館で実施している儀礼は、博物館の文化伝承活動の一環として行っているものである。それらの中にはかつての儀礼を再現しているものもあり、また伝統を踏襲し、現代の生活状況に合わせた新しい形、対象への儀礼もある。

便所送りがかつて行われていたのかどうかということについては、管見の限りでは史資料には見当たらない。だが、伝統的に行われてきた儀礼の一つに、古くなったり壊れたりして役目を終えたものの霊を神の国へ送り帰す、物送り儀礼がある。今回の便所送りの際にも、概念的に物送り儀礼と重なる部分がみられたことから、その範疇に属するものと考えられるのではないだろうか。

身の回りのあらゆるものは神の化身である、と考えてきたアイヌの世界観に沿えば、便所もまた神の化身した姿であり、便所の四隅を守る神々、便槽を司る神々、そして便所全体を統括する神など、さまざまな神が存在している。便所を送るということは、儀礼を通してそれら諸神に対して感謝を伝え、その仮装を解いて神々の世界へお帰りいただくということである。

以下、便所送り儀礼の概要を紹介する。

4月16日朝の、ポロチセでの火の神への祈りから、儀礼がはじまる。祭主がポロチセにある

二つの炉で、火の神に酒を捧げながら、これから便所を取り壊し、便所の神に神の国へお帰りいただく旨を告げる。火の神は人間にとって最も身近で位の高い神であるため、最初に儀礼のはじまりを告げるとともに、他の諸神へも火の神を通して話が伝わり、儀礼が滞りなく進行するよう願うのである。

次に、送りの対象となる便所の前での祈りがはじまる。便所の前に作られた飯の炉の火は、ポロチセの火の神の分身となるものである。

列席者全員が着座すると、まず火の神、便所全体を統括する神、便所の四隅を守る神々、そして便槽を司る神々へ、イナウ（木幣）を立てる（図参照）。イナウは神々への捧げものになると同時に、人間の祈りを正しく神々へ伝えてくれる仲介役になると考えられている。

全員で拝礼をした後、祭主があらためて火の神に便所を送ることを告げる。次に、列席者が分担して、便所の諸神へ祈りを捧げる。便所の四隅および便槽を司る神々へは、座を立ててその場所まで行って祈る。

祈りが終わると、神々の仮装を解くことになる。各々が鉈や金槌を持ち、それを使って土台のコンクリートを一部欠いたり、柱やドアなどに傷を付けたりしていく。物送り儀礼の際にこれと同様の所作を行うが、アイヌは物の一部を破損させることで、神の霊と身体（=物）とが分離し、神の霊が神々の世界へ帰ることができるのだと考えている。

再び全員が着座して送りを無事に終えたことの報告と感謝の祈りを、火の神と諸神へ捧げる。

次に、土地の清めの儀礼の準備に入る。アイヌは自分たちが利用する土地は、土地を掌握する神からの借りものであると考えているので、長い間借用してきた土地は、清めてから神へお返しするのである。

事前に用意しておいたエンジュの枝を、鉈で10センチ程の長さに刻んでいく。エンジュには独特の強い匂いがあり、古くからその匂いに魔除けや清めの力があるものと考えられてき

た。刻んだ枝を膳に載せ、火の神へ清めの儀礼を行うことを告げる。その後、全員で拝礼をして解体前の祈りを終えた。

エンジュの枝ののった膳以外の用具類は全てボロチセへと下げ、便所の取り壊し作業に入る。重機も用いて便所を解体し、埋まっている便槽を撤去する。廃材等を全てその場から取り除いた後、土地の清めの儀礼に入った。

火の神にあらためて儀礼の開始を報告した後、一人がエンジュの枝ののったお膳を持ち、「フッサ、フッサ」と大きな声で唱えながら、それを便槽跡および便所の建っていた敷地跡全体に撒く。次に、二人が刻んでいない長いエンジュの枝を両手に持ち、便所の入り口のあった位置から二手に分かれて、枝で地面を叩いて「フッサ、フッサ」と唱えながら、敷地跡をぐるりと回っていく。便槽跡までいくと、そこに枝を投げ入れて座に戻る。火の神に土地の清めを終えたことを報告し、最後に全員で拝礼をして儀礼を終えた。

その後、重機を用いて便所跡に土を入れて埋め戻し、整地を行った。

翌日、後祭を実施した。これは、前日の儀礼

や作業に不足や手違いがなかったかどうかを、神々に確認するものである。もし何か誤りがあった場合には、前夜の夢見や翌朝のイナウの状態、神々が意志を伝えてくれると考えられており、その際には神々へお詫びを申し上げるとともに、適切な手段で誤りを正さなければならない。場合によっては、再びそのための儀礼を行うことになる。

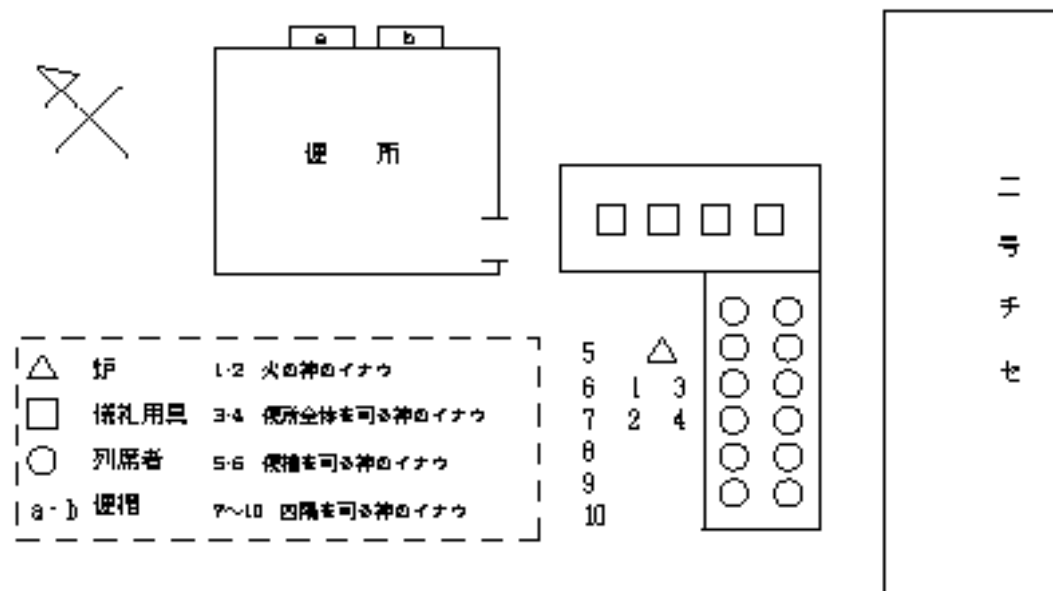
この日は、前日の便所送りに関しての不足や手違いはなかったものと確認され、滞りなく便所の送りが終了したことへの感謝の祈りを神々に捧げて、便所の解体に関わる儀礼全てが終了した。

指 導：藤村久和（北海学園大学教授）

儀礼祭主：新井田幹夫（伝承課）

儀礼列席：山丸郁夫・野本正博・野本三治・岡田恵介・山丸悦子・野本テツ子・村木ハツヨ（伝承課）、秋野茂樹（学芸課）、古仲滋己（総務課）、北原次郎太（大学生）

（飯塚晶子）



便所送り儀礼の各種配置

博物館短信

フィンランド「Same Museum」訪問

3月24日～4月2日、当館職員5名がフィンランドを訪れ、ラップランド州イナリにある当館の姉妹博物館、サーミ博物館の新館開館式典に出席した。(詳細は2～3頁)

スミソニアン国立自然史博物館展示協力

来年4月から開催予定の特別展「アイヌ - 北の民族の精神 - 」の展示にかかわる協力要請を受けて、当館は今年5月～10月までの予定で、伝承課職員野本正博を同地へ派遣した。アイヌの伝統家屋、板綴り舟、および熊送りの儀礼の様子を復元する。なお、同展はワシントンでの8ヶ月間の開催後、約2年間全米各地を巡回する予定。



チセの模型を製作する様子

在ドイツアイヌ民族資料調査

当館は、財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構との共催により、来年1月31日から3月10日までの間、ドイツの博物館が所蔵するアイヌ資料の特別展の開催を予定している。それにさきだち、当館の児玉マリ、村木美幸両学芸員が5月16日～29日、東京国立博物館の佐々木利和氏らとともにドイツに赴き、ベルリン国立民族学博物館、ライプツヒ州立民族学博物館、ケルン市立民族学博物館において、借用資料の事前調査を行った。

儀礼の実施

4月27日 チブサンケ(舟下ろし)

4月29日 コタンノミ

藤村久和氏(北海学園大学教授)の指導のもとに当館職員が、当施設を守護する神々への感謝の祈りを捧げた。

5月1日 安全祈願祭

4月16日～6月20日

トイレの移築に伴う儀礼

当館2号チセ裏にあった職員用トイレの解体に伴う「便所送り」(詳細は5～6頁)、湖畔東屋跡の新しい便所建設予定地での地鎮祭、そして新築後の完成式という一連の儀礼を行った。また、トイレの移築に付随して4月24日～26日には、トーコロカムイのヌサを湖畔の他の場所へ移設した。移設にあたりトーコロカムイをはじめ関係諸神に対するカムイノミを行った。

古式舞踊の公演

6月21日

カモイ岳国際民俗音楽祭(歌志内市)

15名出演

7月25日～27日

石神火まつり(青森県森田村) 16名出演

平成10年度アイヌ文化教室の開催

第1回アイヌ文化教室/アイヌ語講座

テーマ:「やさしいアイヌ語文法」

日時:5月29日・30日午後6時～8時

講師:中川 裕(千葉大学文学部助教授)

参加者:93名(のべ人数)

- *中川裕・中本ムツ子共著『エクスプレスアイヌ語』(白水社)を教材とし、あわせて千歳在住の伝承者であった故白沢ナベ媼のアイヌ語発音ビデオを用いて、アイヌ語の発音及び基本的な文法を学んだ。

第2回アイヌ文化教室/体験講座

テーマ:「オオウバユリを掘ろう」

日時:7月5日午後1時半～4時

講師:野本リヨ(当館伝承課芸能顧問)

飯塚晶子(当館学芸員)

参加者:26名

- *当館「コタンの森」でオオウバユリを採取し、鱗茎から澱粉を取り出す作業を体験した。その後屋内(ポンチセ)に場所を移し、オオイ

タドリの茎に水で溶いた澱粉を入れていろいろで焼いたり、オントゥレブ（オオウバユリの澱粉滓を発酵・乾燥させた保存食）で作った団子入りのお粥を試食するなど、伝統的な風味を堪能した。



オオウバユリの鱗茎をついて、澱粉を取り出す

第3回アイヌ文化教室 / 口承文芸講座

テーマ：「座り歌と踊り歌」

日時：7月9日午後6時～8時

講師：萩中美枝（日本口承文芸学会会員）

参加者：47名

* 昭和20～22年に知里真志保らにより採録されたアイヌ音声資料（NHK所蔵）の中から、白老のウポポ（座り歌）をとりあげ、アイヌの歌唱法の特徴や歌詞にまつわる民族誌的な背景などについて学んだ。講師が紹介したウポポの中には現在伝承されているものもあり、参加者が講師の指導のもと、伝統的な歌唱法であるウコウク（歌い手が歌の途中から次々と重なり合い、歌い継いでいく）に取り組む場面もあった。

新刊

シンポジウム録『アイヌのすまいチセを考える』

平成9年9月に同シンポジウムで報告された当館の復元家屋ポロチセの建築過程、建築儀礼を豊富な写真と図版を用いて紹介。また、当分

野に造詣の深い藤村久和、宮宏明、福岡イト子、内田祐一の4氏の報告も併せて収録した。

3月31日発行 B5判 141頁 1,200円

資料受贈

このたび下記の資料をご寄贈いただいた。

* 「児玉コレクション」

寄贈者：児玉マリ（当館学芸員）

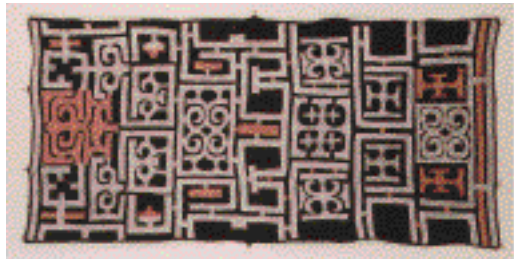
品目：アイヌ民族資料 2,263点

* 寄贈者：山丸タミ（白老町在住）

品目：カムレブ（死者用覆い布） 1点

[山丸シュケシュリ作]

イコロ（宝刀） 1点



山丸タミ氏より寄贈されたカムレブ

平成10年度白老民族芸能保存会の事業実施
（協力事業）

アイヌ語学習会

6月25日、当館1階映像展示室にて、当館学芸員本田優子を講師にアイヌ語学習会を開催した。38名の参加者は、紐や折り紙などを使って、体を動かしながらアイヌ語を学んだ。カムイノミ学習会

7月22日・23日の両日、当館2階研修室にて、藤村久和氏（北海学園大学教授）を講師にカムイノミ学習会を開催した。男性職員を中心にのべ28名が参加し、祈り言葉の内容や表現方法などについて学んだ。

アイヌ民族博物館だより No.39

発行：財団法人アイヌ民族博物館
〒059-0902 北海道白老町若草町2丁目3-4
TEL：0144-82-3914
FAX：0144-82-3685

THE AINU MUSEUM 1998. 7. 31

印刷：株式会社北海道機関紙印刷所
〒006-0806 札幌市北区北6条西7丁目
TEL：011-716-6141
FAX：011-717-5431